看護実践研究センター報告書

平成28年度

目　　次

Ⅰ　はじめに …… 105
Ⅱ　平成28年度事業報告
　1．なごや看護生涯学習セミナー …… 105
　【看護研究セミナー】
　　⑴看護研究いろはの「い」
　　⑵看護研究いろはの「ろ」
　　⑶看護研究いろはの「は」
　【看護実践セミナー】
　　⑷急性期の輸液について学ぶ
　　⑸患者急変対応「何か変、と思ったとき…」
　2．なごや看護生涯学習公開講演会 …… 110
　3．地域連携セミナー …… 111
　4．看護研究サポート …… 112
　5．昭和生涯学習センター共催講座 …… 113
Ⅲ　今後の課題 …… 114

名古屋市立大学看護学部
名古屋市立大学病院看護部

平成28年度看護実践研究センター運営委員会

センター長：明石　恵子（名古屋市立大学看護学部）
運 営 委 員：金子　典代（名古屋市立大学看護学部）
杉浦　和子（名古屋市立大学看護学部）
原沢　優子（名古屋市立大学看護学部）
水野千枝子（名古屋市立大学病院看護部）
山口　孝子（名古屋市立大学看護学部）
吉松　由子（名古屋市立大学病院看護部）
脇本　寛子（名古屋市立大学看護学部）
金子さゆり（名古屋市立大学看護学部・平成28年９月まで）
小田嶋裕輝（名古屋市立大学看護学部・平成28年10月から）
宮内　義明（名古屋市立大学看護学部・平成28年10月から）
事 務 職 員：小林真理子

名古屋市立大学看護学部看護実践研究センター

〒467－8601
名古屋市瑞穂区瑞穂町字川澄１番地
TEL & FAX：０５２(８５３)８０４２
http://www.nagoya-cu.ac.jp/nurse/center/

Ⅰ　はじめに

名古屋市立大学看護学部と名古屋市立大学病院看護部が協力して設置した看護実践研究センター（以下、本センター）は５年目を迎えた。しかし、その前身である看護学部地域貢献委員会における事業も含めると、看護学部と病院看護部の協働による社会貢献は11年目となる。本年度もこれまでと同様に地域貢献事業に取り組み、なごや看護生涯学習セミナー、なごや看護生涯学習公開講演会、地域連携セミナー、看護研究サポート、昭和生涯学習センター共催講座を開催することができた。そしてこれらは、本センターの目的をご理解いただいた講師の方々のご協力と、自らの興味関心やレベルアップを動機としてご参加いただいた皆様によって成り立っていることを改めて感じている。一方、このような事業においては、立ち上げの時期も重要であるが、継続することの方がより難しいことも承知しており、今、その時期にさしかかっていると考えている。

本報告書では、本年度の地域貢献事業の実績を報告するとともに、地域貢献事業を継続するための課題を述べる。

Ⅱ　平成28年度事業報告

１．なごや看護生涯学習セミナー

担当：杉浦和子、山口孝子、水野千枝子

「なごや看護生涯学習セミナー」は、愛知県内の保健医療職者を対象に、より専門性を高め地域住民へのサービス寄与につなげることを目的とした地域貢献事業である。本年度は看護研究セミナー３件、看護実践セミナー２件を開催した。

１）事業実施経緯

時期	内　　容
４月	テーマおよびセミナー担当者募集開始
５月	テーマ申込み状況の把握
６月	全テーマの開催日程、場所決定、教室予約 参加申込方法（メール申込、FAX申込）の検討 募集人数、受講料、応募結果案内方法の決定 チラシ配布先、配布枚数、印刷枚数の決定・発注 受講カード、受講証明書の検討
７月	看護実践研究センターホームページで告知開始 チラシ発送 参加者募集開始、受講生に受講カードの送付 セミナー当日の役割分担、アンケートの検討
８月	参加受付対応およびセミナー当日の役割分担表の作成開始 セミナー申込み締切（申込み締切を延長） 事務に領収書の依頼 情報処理室のパソコン使用IDカード準備（事務へ依頼）
９月～11月	各セミナー実施 実施前：受講者数の決定、受講者リスト作成、講師へ連絡、セミナー当日の委員の業務内容の概要説明、配布資料印刷 実施後：アンケート集計、看護学部ホームページへ開催報告掲載

２）事業の実施状況

【看護研究セミナー】

⑴看護研究いろはの「い」

講　　師：門間晶子（名古屋市立大学 看護学部・教授）
日　　時：平成28年９月７日(水)、９月14日(水)
　　18時30分～20時30分
場　　所：名古屋市立大学 看護学部棟 ４階 410講義室
募集人数：30名
参 加 者：9月7日(水) 18名、９月14日(水) 21名
参 加 費：2,000円

〈内　容〉

今年度は、昨年度同様１回あたり２時間の講義を１週間間隔で２日間実施した。到達目標を5点定め（①看護研究の要素や進め方に関する基本的事項の理解　②日常の実践における疑問の文章化、研究疑問としての表現　③研究論文を読み、文献を検討する際の視点や考え方を具体的に理解　④文献検討の意義と基本的な方法の理解　⑤研究計画書の構成と要素についての理解)、これらに沿って講義やグループワークを組み立てた。手元資料の流れに沿ったパワーポイント資料を提示しながら進めた。

１日目には、まず看護研究とは何かについて、看護研究の定義・特徴・役割等を解説し、次に、研究疑問（リサーチ・クエスチョン）とは何か、それを洗練するヒント、研究デザインとの関連について伝えた。続いて、問題意識の明確化から論文の公表に至る研究のプロセスの全体像を解説し、その最初のステップを丁寧に踏むことの大切さを伝えた。具体的にはワークシートを用いながら、「受講者が疑問をもった看護現象」、「問題だと感じている状況」を書き出してもらい、２～３人で組になってそれらを研究疑問の形で記述するにはどうしたらよいかを話し合ってもらった。次回扱うための論文２点（量的研究・質的研究）を配付し、参考資料として文献クリティークのガイドラインを添付した。

２日目には、看護研究を読み・味わい・そこから学ぶために、前回配付した２件の研究論文を読んでの意見交換を行った。その後論文の種類、種別による査読基準の違いなどを解説し、学習につながりやすい論文を探すヒントにもつなげた。続いて文献検討・文献レビューに関する用語の定義、文献検討の目的、文献検索方法、絞込みのポイント、文献検討結果のまとめ方について解説した。時間の関係から、目標②「リサーチ・クエスチョンの洗練」目標③「研究論文の読み方」のどちらかに焦点を当てざるを得ず、受講者の反応を見ながら②に重点を置いた。最後に、研究計画書について、その役割、要素、作成例について説明した。特に量的な研究では重要となる、研究のねらいや方法、扱いたい事象を明確にするための「概念枠組み」の例を示し、描くことをすすめた。

本セミナー（いろはの「い」）から半数以上の人が看護研究いろはの「ろ」「は」に進むことがわかっており、また、自施設で看護研究の指導的役割を期待されている人もいたことから、看護研究の基本的事項をおさえたうえで、少しでも研究を前に進めるための「リサーチ・クエスチョン」や「文献検討」に実践的に取り組もうとしたが、難しく感じた人もいたようであった。連続性の観点から、「い」「ろ」「は」を通した受講者の到達感や満足感がどうであったのかがわかれば、修正すべき点も見えやすいと感じる。

〈アンケート結果〉

最終日の参加者21名にアンケート用紙を配布し、21名から回答があった（回収率100%）。

セミナーの参加動機は「自分の看護のレベルアップ」10名（47.6%）、「新しい知識を得る」６名（28.6%）、「必要に迫られて」６名（28.6%）などであった。また、セミナーの内容は「わかりやすかった」が11名（52.4%）、「難しかった」が２名（9.5%）であった。自由記載は、「研究は難しいものだと思っていたがとても楽しい講義で面白かった」「基本的なことから具体的なことまで丁寧に講義してもらい不安が解消された」等であった。これらから看護研究に取り組む看護職にとって有意義なセミナーとなった。

⑵看護研究いろはの「ろ」

講　　師：樋口倫代
（名古屋市立大学 看護学部・教授）
金子典代
（名古屋市立大学 看護学部・准教授）
日　　時：平成28年９月24日（土）
９時00分～12時10分　13時00分～16時10分
場　　所：名古屋市立大学 看護学部棟 ４階 401情報処理室
募集人数：20＋５人増員　合計25名
参 加 者：24名
参 加 費：3,000円

〈内　容〉

今年度も昨年度同様、量的研究を行う際のサンプリング、データ収集、入力のプロセス、SPSSを用いた統計分析に関する講習を行った。午前、午後の一日をかけてのプログラムとし、午前は、量的研究を行うにあたって基本となる内容、１）疫学と統計学の位置づけ、２）記述統計、３）統計学的推論の基本、４）疾病（事象）の頻度測定と比較、午後は主に演習としてデータ入力、SPSSを用いたデータ分析、基礎統計、単純集計、２項目の質的変数間の関係を見る分析を行い、量的変数間の関係を見る分析に関する講義も行った。対象者のデータ分析経験は様々であることが考えられたため、個々のレベルに対応できるように内容を工夫した。概要は以下の通りである。

１）疫学と統計学の位置づけ

量的研究における、疫学と統計学の位置づけ、および、研究においてどのように利用できるのかを概説した。

２）記述統計

データの種類、および、データの種類による記述統計の方法について概説した。カテゴリデータについての頻度と割合、数量データについての平均、分散、標準偏差、

中央値、標準偏差について例を挙げて解説し、使い分けについて説明した。

3）統計学的推論

統計学的推論における、母数、標本、統計（値）の関係、標本抽出の基本的な考え方、標準誤差について概説した。さらに、推定と検定について、基本的考え方、および、例を示した。検定に関しては、ｔ検定とχ^2検定について説明した。

4）疾病（事象）の頻度測定と比較

予定は1）～3）までであったが、30分ほど時間が余ったため、追加スライドで、有病率、発症率、相対リスク、寄与リスク、人口寄与リスクなどについて概説した。

5）演　習

⑴調査を実施するプロセス（エクセルを用いた事例データによる演習）

量的質問紙の調査の事例を想定し、サンプルサイズについての考え方、対象者の参加率の向上に向けた工夫、調査項目の作成について基礎事項を説明した。次いで、調査実施、データ収集、分析のプロセスについて、特に調査票の回収とデータ・クリーニング、データ・コーディング（コーディングマニュアルの作成）、データのダブルエントリーと入力ミスを発見する方法について、あらかじめ用意したエクセル・データを用いて演習した。

⑵SPSSを用いたデータ分析

SPSSを使用して実施できる量的データの分析手法の説明を行った。事前に準備した模擬データを用いて、SPSSにより基礎統計量の算出、平均値の算出、群別の平均値の算出などを行った。またχ^2検定、ｔ検定などの説明も行い、SPSSソフトウェアを使用する際にはどの数値を参考にすべきか、注意点の説明も行った。データの解析方法は多くあり、ソフトウェアにより簡便に実施できるようになってきているが、研究のデザイン、得るデータにより用いる分析手法がまったく異なるため、研究計画の洗練に時間をかける必要性についても解説した。

〈アンケート結果〉

参加者24名にアンケート用紙を配布し、22名から回答があった（回収率91.7%）。

セミナーの参加動機は「自分の看護のレベルアップ」10名（45.5%）、「新しい知識を得る」９名（40.9%）などであった。また、セミナーの内容は「わかりやすかった」が８名（36.4%）で、「難しかった」が１名（4.5%）であった。自由記載は、「院生時代にあいまいになっていた知識を確認・整理できた。データ入力の具体的な方法（ダブルエンタリングやコーディングマニュアル作成）を知らなかったので役に立った」「今やっている研究に対して（これからすすめていく）質問紙など計画がたてやすくなった」「疫学からの統計学は具体的でわかりやすかった」「統計学は学生が時間を費やして学ぶもので、１日で知ろうと思うのは甘かった」等であった。現場で必要に迫られ、これから自分で分析を始める受講生のニーズにそったセミナーとなった。

⑶看護研究いろはの「は」

講　　師：金子典代
（名古屋市立大学 看護学部・准教授）
日　　時：平成28年９月27日(火)、10月4日(火)
18時30分～20時30分
場　　所：名古屋市立大学 看護学部棟 ４階 402講義室
募集人数：15名
参 加 者：9月27日(火) ６名、10月4日（火）７名
参 加 費：2,000円

〈内　容〉

行動理論を用いた集団・個人の健康行動の分析、健康教育やヘルスプロモーションへの活用の実際を学ぶことを目的とするセミナーを２回に分けて実施した。夜間に開講したことで、臨床現場で勤務する看護師も参加可能となったようであった。概要は下記の通りである。

第１回は、参加者のバックグラウンドやニーズも様々であることを考慮し、ヘルスプロモーション、行動理論の基礎、行動理論が重視されるようになった背景について概説した。また、代表的な行動理論である保健行動理論、自己効力理論、エコロジカルモデル、変化ステージ理論、計画的行動理論、ローカスオブコントロール理論について説明を行った。理論が生まれた背景、各理論の主要コンセプトの説明、実際の患者教育、その内容の評価に理論をどう活用するかも実例をもとに説明した。また行動理論により対象者の行動を詳細に分析し根拠に基づくプログラムを立案することも重要である。そのため、最近強い関心が集まっている。個人の努力では変えることが困難な対象者の社会的背景からくる健康格差とその是正についても説明した。

第２回では、第１回の復習を行ったあと、ストレス理論、ソーシャルサポート理論を説明した。また特に対象への行動変容をいかに効果的に行うか、ということに焦点を当て、行動理論のみならず、近接した別の学問体系である認知行動療法、カウンセリングについても行動変容の支援の場面で活用できるテクニックを紹介した。また実際の患者ケア、行動変容支援に活用する方法を解説した。

〈アンケート結果〉

最終日の参加者７名にアンケート用紙を配布し、７名から回答があった（回収率100%）。

セミナーの参加動機は「自分の看護のレベルアップ」4名（57.1%）、「必要に迫られて」３名（42.9%）などであった。また、セミナーの内容は参加者全員がわかりやすかった、今後に活かすことができるものであると思うと回答した。自由記載は、「簡単には自分はできないと思うが、知ることができただけでもよかった。「たくさんの理論を話してもらったが、もう少し数を減らして詳しく教えてもらってもいいかと思った。具体的に聞くとより実践にいかせる気もする」等であった。これらより、患者への指導に難しさを感じている看護職の皆様に、強い関心が集まっている最近の話題とマッチさせた大変役立つセミナーとなった。

【看護実践セミナー】

⑷急性期の輸液について学ぶ

講　　師：薊隆文（名古屋市立大学 看護学部・教授）
日　　時：平成28年10月７日(金)、10月14日(金)、10月28日(金)　18時30分～20時30分
場　　所：名古屋市立大学 看護学部棟　４階 410講義室
募集人数：20名
参 加 者：10月７日(金) 11名、10月14日(金) 12名、10月28日(金) 10名
参 加 費：3,000円

〈内　容〉

今年度初めて取り組むテーマであり、３回に分けて実施した。

１）輸液についての基礎知識：体液・浸透圧・電解質（10月７日）

「急性期の輸液」を学ぶうえで、まず必要な体液について学習した。体液管理は量の管理と質の管理に分かれる。量とは水分であるが、水は常にNaとともに移動すること、移動は主にNaが作る浸透圧勾配によっていること、脱水は水とNaによって分類されることを学んだ。

２）輸液管理に必要なモニター：酸塩平衡と輸液管理のモニター（10月14日）

体液の量と質の変動によって血液の酸塩基平衡が乱れる。そこで、酸塩基平衡の基礎について解説した。血液は酸素の運搬が主な役目であり、輸液管理とは酸素の運搬の維持である。また、輸液管理を行う上で指標とするモニターについて、古典的な指標、最近の新しい指標について、その原理から解説した。

３）救急・手術・ICUでの輸液管理の実際：輸液の実際と症例（10月28日）

急性期に用いられる様々な輸液剤について学習し、このシリーズのまとめとして症例をあげて具体的な輸液の戦略について解説した。急性期に用いられる製剤は主として等浸透圧であること、輸液剤は基本的に生食と5%ブドウ糖液で作られること、脱水のパターンによって輸液剤を変える必要があることを学習した。症例として、イレウス、心不全、出血性ショックを例にとって、輸液の量・質・経路・タイミングについて解説した。

〈アンケート結果〉

最終日の参加者10名にアンケート用紙を配布し、9名から回答があった（回収率90%）。

セミナーの参加動機は「新しい知識を得る」６名（66.7%）、「自分の看護のレベルアップ」５名（55.6%）などであった。また、セミナーの内容は「どちらかといえばわかりやすかった」が３名（33.3%）であったが、

全員が今後に活かすことのできる内容であったと回答した。自由記載は、「もっと時間に余裕をもって全部しっかり聞きたい」「電解質やモルなどもともと苦手な分野なのでとても難しかったが、とてもおもしろかった」「難しかったが、大変有意義だった」「輸液について、これまで以上に医師と相談や報告ができそうであると考え、そのようにしていきたいと思った」等であった。これらより、知識を深め臨床実践に生かすことの出来るセミナーとなった。

⑸患者急変対応「何か変、と思ったとき…」

講　　師：清水真名美、寺澤涼子、加藤紀子、石井房世（名古屋市立大学病院救急看護・集中ケア認定看護師）
日　　時：平成28年11月13日（日）
9時30分～12時30分、13時30分～16時30分
場　　所：名古屋市立大学 看護学部 西棟２階
講義室A，演習室A，E，F，G
募集人数：20名＋２名増員
参 加 者：18名
参 加 費：3,000円

〈内　容〉

このセミナーでは受講生が患者急変に気付き、医師などに報告できることを目的とした。患者急変対応コースfor Nursesガイドブックによれば、「急変とは、予測を超えた状態の変化をいい、その程度は観察者の予測範囲によって異なる。一般にはその変化の方向性は、病態（症状）の悪化を意味し、何らかの医療処置を必要とする場合を表現している」と定義されている。私たち看護師が急変を見逃さないようにするためには、患者の病態変化に気付き、急変対応の必要性を判断する能力、そして、医師などに迅速かつ適切に報告する能力が求められる。

しかし、急変はいつ起こるか分からないため、常日頃から急変に備えて観察する能力が必要であり、患者と接する時には、常に第一印象の観察を心がけることが大切である。第一印象とは、「最初に出会った数秒間で、外見全体を視覚と聴覚を使って、アセスメントする」ことである。そこで必要なことは、アセスメントを行い、患者に「死に結びつく可能性のある危険な兆候」があるのかどうかを判断することである。アセスメントの結果、心肺停止状態と判断した場合、一次救命処置を実施する。心肺停止状態になっていないが、危険な兆候があると判断した場合、ナースコールで応援要請を行いながら、さらに詳しく患者の状態を把握するために一次評価を行っていく。一次評価では、簡単な器具（血圧計・心電図モニター・パルスオキシメーター）と触診・聴診で、命を支える「A：気道」「B：呼吸」「C：循環」「D：意識」「E：外表」に問題がないか素早く観察を行う。すなわち、患者が心停止にどの程度近づいているかを判断するために、「A・B・C・D・E」の視点で評価するのである。そして、患者の状態を観察しながら、患者に何が起こっているのかアセスメントを行い、SBAR*を用いた報告を医師などに行う。

これらの方法を知り、実践できるようになるために、まず観察のポイントや観察方法を講義で学んだ後、机上シミュレーションを行い、講義内容の理解を深めてもらった。そして、実働シミュレーションで人形を使用し、学んだ内容を実践してもらうという段階を経て学習するセミナーとした。

＊SBAR：医療現場で用いられる報告の形式で、S：Situation（患者の包括的状態）、B：Background（入院の理由・臨床経過）、A：Assessment（状況評価の結論）、R：Recommendation（具体的な要請内容）を意味する。

〈アンケート結果〉

参加者18名にアンケート用紙を配布し、18名から回答があった（回収率100％）。

セミナーの参加動機は「自分の看護のレベルアップ」12名（66.7％）、「興味・関心があった」７名（38.9％）などであった。また、セミナーの内容は、全員が「わかりやすかった」と回答した。自由記載は、「講義で習ったことをシミュレーションで再確認できたのでよかった。今日学んだことを振り返り、日々の業務にいかしたい」「振り返りができてとても勉強になった。グループワークで情報を共有することでより多くの学びを得ることができた」「臨床現場で生かせる内容だと思った。今後の通常業務、急変時対応につながるよう振り返り、知識にしていきたい」「今までは気持ちが焦って体が動かなかったが、これからは怖がらず積極的に急変対応したい」等であった。知識に加え、急変事例の観察や判断力の共有、シミュレーション人形を使用した演習の構成により、段

階的にすぐに活用できる実践力を修得できるセミナーとなった。

2．なごや看護生涯学習公開講演会

担当：金子典代、脇本寛子、金子さゆり、吉松由子

「なごや看護生涯学習公開講演会」は、地域の保健医療職者が求めている知識、情報、話題などを提供し、結果として市民の皆様に提供する医療の質向上に貢献することを目的としている。その時々の医療情勢をふまえてテーマを選定し、その分野で活躍中の講師を招聘し、毎年1回開催している。

1）事業実施の経緯

時期	内　　容
4月	テーマの提案
5月	テーマと講師の選定、講師との交渉開始
6月	講師の決定、スケジュールや参加者募集方法などの検討
7月	チラシ案の作成、チラシの送付先と印刷枚数の検討
8月	チラシ原稿の最終確認、印刷依頼（1,700部）
9月	看護実践研究センターホームページと全学ホームページで告知開始 チラシ発送 参加者募集開始（FAX、名古屋市電子申請サービス） 看板・垂幕の検討 プレスリリース依頼
10月	当日スケジュール・役割分担、アンケート内容確認 講師謝金・交通費・会議費・会議会場の申請 講師への最終確認書類の発送
11月	参加申し込み状況、当日スケジュール・役割分担の最終確認 事前受付リストの作成、領収書発行の依頼 配布資料の最終確認、配布資料とアンケートの印刷

2）事業の実施状況

テーマ：地域に密着した在宅ケアの実際　医師・歯科医師・看護師・栄養士・言語聴覚士と連携した食べることへの支援
講　師：森亮太（杉浦医院　院長）
日　時：平成28年11月11日(金）18時00分～19時30分
場　所：名古屋市立大学病院　大ホール
参加費：500円
参加者：132名（講演会関係者含む）

〈内　容〉

高齢者にとって「食べること」は楽しみや生きがいを維持するうえできわめて重要である。しかし、病院では誤嚥の危険性が高く、飲食禁止とされてしまう患者さんも多い。杉浦医院では八事を拠点に地域密着型の在宅医療にとりくみ、訪問診療開始後早い段階で歯科医、歯科衛生士とも連携し、食べることの支援体制を整えている。歯科と医科が早期から連携し口腔ケアの準備を行い実践につなげることで、大好きなものを笑顔で食べる支援につなげている。

ご講演では、医師、歯科医師、歯科衛生士、看護師、管理栄養士、言語聴覚士が連携して行う食べること、生きることの支援の実際について豊富な患者事例を紹介しながら、ケアの実際を分かりやすく紹介する写真や患者さんへのインタビュー動画も活用してわかりやすくお話しいただいた。

3）参加者アンケート結果

参加者120名にアンケート用紙を配布し、103名から回答があった（回収率85.8%）。

参加者の約半数は看護師49名（47.6%）であったが、栄養士、歯科衛生士、ケアマネージャー事務職員、教員と本公演のテーマを反映して多職種が参加していた。講演内容が「わかりやすかった」もしくは「どちらかといえば分かりやすかった」と答えた人は102人（99.0%）とわかりやすさについて高い評価を得られた。

以下に参加者の感想の一部を掲載する。

- 分かりやすいということに加え、「聞いていて楽しい」と久しぶりに感じました。
- 実際の在宅医療と各職種との連携がとてもわかりやすく、楽しかったです。
- 患者様の食べたいとの意志の尊重をすることの大切さを学んだ。
- 実際の在宅の様子が動画や症例を通じて、理解イメージがつきやすかった。
- 将来病棟勤務を経て訪問、地域での医療に携わりたいと考えており具体的なイメージを持つことが出来ました。

4）課　題

本年度の開催時期、時間、運営については、特に問題はなかった。今回は、名古屋市内の病院のみならず、歯科衛生士、管理栄養士を養成している大学など幅広く広報を行ったが、参加者の所属施設は、病院が45人（43.7%）と最も多く、居住地は名古屋市在住者が84人（81.6%）と最も多かった。アンケートによると来年度の講演会についての希望は、全体では「認知症ケア」50人（48.5%）、「退院支援」32人（31.1%）、「がん看護」21人（20.4%）、の順であり、看護師49名のみに限定すると「認知症ケア」27人（55.1%）、「退院支援」17人（34.7%）の順に希望が多かった。これらの結果も参考にし、来年度のテーマを選定したい。

3．地域連携セミナー

担当：金子さゆり、脇本寛子、小田嶋裕輝

「地域連携セミナー」は、保健医療福祉関連職種の方々や市民の皆様と連携して取り組むべき社会的な問題を取り上げている。さまざまな立場の人々が一緒に考えることで、解決の糸口や新たな方策の発見につながることを期待している事業である。

1）事業実施の経緯

時期	内　　容
27年12月	テーマと講師の選定、講師との交渉
28年１月	講師およびテーマ決定 公文書発送
２月	広報なごや５月号への掲載依頼
３月	チラシ案の作成、申込方法の検討、送付先リスト作成
４月	チラシ原稿最終確認、印刷依頼（1200部） 看護実践研究センターホームページ・全学ホームページで募集開始
４月	チラシ発送 参加者募集開始（FAX、インターネット） 参加申込者への参加の可否連絡 入試広報課へのプレスリリース依頼
５月	当日配布用のアンケート内容・看板の検討 講師へ当日資料等の最終連絡 名古屋教育医療記者会、名古屋市政記者クラブへのプレスリリース
６月	準備状況、参加申し込み状況、当日スケジュール・役割分担の最終確認
７月	事前受付リスト作成開始、領収書発行の依頼 配布資料とアンケートの印刷

2）事業の実施状況

テーマ：こころの健康について考えてみませんか－働く世代のメンタルヘルス－
講　師：新畑敬子（名古屋市精神保健福祉センター所長）
日　時：平成28年７月９日(土) 13時00分～15時00分
場　所：名古屋市立大学 看護学部棟 ３階 308講義室
参加費：500円
参加者：75名（講演会関係者含む）

〈内　容〉

昨今、ストレスやメンタルヘルスという言葉が当たり前のように使われており、それだけこころの健康づくりが身近なものになり、人々の関心事となっている。生きる上で適度なストレスやメンタルヘルスは大切なことである。その一方で、ストレスを感じている人が多く、メンタルヘルスを考えなければいけない状況にあるとも考えられている。今回、精神保健分野でご活躍されている新畑敬子氏をお迎えして、「ストレスとは」「ストレスにどう対応するか」「日々の生活の中でできること」などをご講演いただいた。

ご講演では、こころの健康づくりのために、自身のストレスに気づくポイントや対応方法を具体的にお話しいただいた。自分なりのリラックス方法を身につける、十分な睡眠をとる、考え方・過ごし方を変える、不安や悩みを一人で抱えず相談上手になるなど、ストレスをためないようにするコツを学ぶことができた。講演後には参加者からたくさん質問があり、重要なテーマであると再確認された機会でもあった。

3）参加者アンケート結果

参加者70名にアンケート用紙を配布し、63名から回答があった（回収率90%）。

参加者の多くは会社員27名（42.9%）であった。参加動機は「興味関心があった」と答えた人は39人

(61.9%) であり、「新しい知識を得る」20名 (31.7%) であった。

以下に参加者の感想の一部を掲載する。

- すべて役立つ内容で興味深くきくことができた。職場のスタッフにもセルフケアなど伝えていきたい。
- 行動レベルまで具体的に講義いただけたのでとても分かりやすかった。特に起床時間に気をつけたい。
- 統計や具体例も適度な量で理解しやすくて良かった。職場で管理職として働いているので、気づきのポイントを参考にしていけたらなと思う。

4）課　題

本年度の開催時期、時間、運営については、特に問題はなかった。参加者のアンケートによると来年度の講演会についての希望は、「メンタルヘルス」「防災・災害時の健康管理」「うつ病」であり、来年度の参考とする。市民の皆様や保健医療福祉関連で働く皆様が何を求めているのか、頂いた意見を基に反映できるようにテーマを企画していく必要がある。

4．看護研究サポート

担当：原沢優子、水野千枝子

「看護研究サポート」は、看護職者が個人またはグループで行う看護研究に対して、看護学部の教員がそのプロセスや研究成果の発表を支援することを目的としている。臨床の場にフィードバックできる科学的根拠に基づいた看護研究の推進を通して、よりよい看護の提供に貢献することを目指している事業である。

1）事業実施の経緯

【平成26年度 後期開始 看護研究サポート】継続 2 件

時期	内　　容
9 月	看護研究サポート実績報告書の提出依頼
10－11月	看護研究サポート実績報告の提出→ 2 件ともにサポート終了

【平成28年度 前期開始 看護研究サポート】

新規 4 件＋継続 2 件

時期	内　　容
4 月	研究チームの募集開始（案内の発送、ホームページへの掲載）
5 月	研究チームの募集締切 サポート教員の募集開始
6 月	サポート教員の募集締切 研究チームとサポート教員のマッチング 研究サポート開始
8 月	サポート状況の中間報告
10月	サポート研究の研究成果HP掲載
2 月	看護研究サポート実績報告書の提出依頼
3 月	看護研究サポート実績報告

2）事業の実施状況

今年度は、募集案内の改善を行った。研究サポート期間、一回のサポート時間、年間サポート回数の目安、サポート内容と方法、終了時の報告書の確実な提出などを検討し、募集案内に明記した。同時にサポート教員へも同様の内容を連絡して共通理解ができるように工夫した。本年度は、例年の課題であった、外部病院のサポートにおける連絡の途絶えはなかった。

今年度 4 月発送分の応募件数は新規5件、継続2件であった。後に 1 件のキャンセルがあり、平成26年後期開始の継続 2 件を併せてサポートした研究数は全部で 8 件であった。年間のサポート予定件数は 8 件であり、10月の募集は行わなかった。 8 件中、名古屋市立大学病院所属が 5 件であり、 3 件が外部の病院であった。

本年度のサポート教員は 8 名であった。研究テーマの専門性を考慮して教員へのサポート依頼を行った。本年度は学位を持つ助教も対象枠に広げて依頼した。学部の欠員教員数が解消した点も含め、本年度は指導可能な教員の選定は円滑に進み、 1 教員が 1 テーマの担当となり、教員一人への負担軽減が図れた。

過去の研究サポートの内容を報告書から分析したところ、研究計画書や質問紙の作成、倫理審査提出のための準備、データ分析方法、学会発表のための研究結果のまとめ方が主なサポート内容であることが明らかになった。これを踏まえ、今後の教員の報告書にこれらの実施状況が記載されるよう改善したため、今後、継続して動向を

把握する。

本年度は、年間のサポート規定数を初期段階で超えるチームが９月に発生し、研究チームから追加料金の問い合わせがあった。また、教員からは、規定された回数と時間内でサポートが終了できていない現状への苦情、報告書提出、ならびに追加料金制についての提案があった。これは次年度研究サポートの課題とした。

研究サポートの受講料は昨年度と同額の１万円としたが教員へは、サポートに対する諸費用としてこれまで１万円の研究費補助があったが、本年度から5,000円に減額した。また、サポート期間は年度末で終了し、翌年度の延長には再度、10,000円が必要であることを明確にした。

３）課　題

例年、教員から意見があったサポート回数、時間の超過について、本年度は、研究チームから料金支払いの問い合わせが生じる案件があった。また、教員からの報告書内にも追加料金制についての提案が記載された。研究支援に必要な時間とそれに見合った金額の設定、研究チームによるサポート必要量の格差解消ができる料金設定を検討する必要がある。

また、研究サポートは１年としているが、現実は６月開始の３月締めになっている。受講者ニーズを踏まえ、１年間のサポートへと齟齬を改善する必要がある。

５．昭和生涯学習センター共催講座

担当：明石惠子、脇本寛子、宮内義明

「昭和生涯学習センター共催講座」は、昭和区との共催で行っている事業であり、本年度で３回目である。市民は大学という普段入ることの出来ない場で、専門的で先進的なことを低額で学ぶことができ、大学としては、学生以外にも学びを提供するという地域貢献ができる事業である。

１）事業実施の経緯

時期	内　　容
４月	昭和生涯学習センター担当者との講座開催方法検討（実務は指定管理者である名古屋市教育スポーツ協会が担当）
６月	テーマと講師の選定、講師との交渉開始
７月	テーマ、講師、開催日時決定 広報、参加者募集開始（名古屋市教育スポーツ協会担当者）
９月	講師への依頼書発送（名古屋市教育スポーツ協会担当者）
11月	名古屋市教育スポーツ協会担当者と共に使用教室などの最終確認
１月	会場までの案内板作成

２）事業の実施内容

平成28年度後期昭和生涯学習センター事業として、「ストレス解消のヒケツ」をテーマとする全５回の講座を実施した。第１回は公開講座であり、参加者は101名であった。２回目以後は有料（受講料：1,200円）で、応募者86名から抽選で40名の受講者が選定された。また、本年度は、講座を担当する看護学部教員にも名古屋市教育委員会から講師謝金が支払われることとなった。

時期	内　　容	講　　師
1月19日 10:00-12:00	人が不安になるのはなぜ？　ストレスを感じるのはなぜ？	小川　　成（名古屋市立大学大学院医学研究科・病院講師）
1月26日 13:30-15:30	腹が立たないヒケツ ～見方が変わると心が変わる～	香月富士日（名古屋市立大学看護学部・教授）
2月2日 13:30-15:30	笑顔になるヒケツ　～笑いの体操でストレス解消～	池田　由紀（名古屋市立大学看護学部・准教授）
2月9日 13:30-15:30	心が元気になるヒケツ①　～「元気に役立つ道具箱」を作ろう～	小川　雅代（名古屋市立大学看護学部・講師）
2月16日 13:30-15:30	心が元気になるヒケツ②　～言葉の力とイメージング～	池田　由紀（名古屋市立大学看護学部・准教授）

３）参加者アンケート結果

主催者である昭和生涯学習センターが実施した参加者アンケートの主な結果は、以下の通りである。

第１回公開講座については、参加者101名にアンケート用紙を配布し、76名から回答があった（回収率75.2%）。講座の内容について「たいへんよかった」もしくは「まあまあよかった」と答えた人が69名（90.8%）と高評価であった。参加者の感想の一部を掲載する。

- とてもわかりやすくてストレスについて知らない単語の意味も理解できた。
- 日常の生活の中で、ストレスを軽減して過ごしたい。運動・食事も大切・呼吸法も取り入れたい。
- マインドフルネスの方法を教えてもらえ嬉しかった。早速、図書館に行き関連本を借りたい。

第２～５回目までの連続講座については、最終日の参加者31名にアンケート用紙を配布し、全員から回答があった（回収率100%）。講座の内容、講師の指導、講座全体の満足度についてほぼ全員が「たいへんよかった」もしくは「まあまあよかった」と回答し、高評価であった。参加者の感想の一部を掲載する。

・いろいろな先生から、いろんな方向でストレスを解消していく方法が教えられたのでとても良かった。
・グループでというと身構えてしまうが、話し合いの後は気分がよくなり、良かった。
・日常生活において大なり小なりストレスがあるのでとてもよい企画だった。

4）課題

昭和生涯学習センターの担当者から、今後も共催講座を継続したい旨の申し出があった。市民のニーズに合ったテーマを選定するとともに、看護学部教員や病院看護師の専門性を活かした講座となるよう協力して実施していきたい。

Ⅲ　今後の課題

大学の使命は教育・研究・社会貢献であり、本センターは、名古屋市立大学看護学部と名古屋市立大学病院看護部が行う社会貢献事業の企画・運営の役割を担っている。本センターの前身である看護学部地域貢献委員会としての事業も含めて振り返ると、平成18年度に看護職者を対象とするセミナーを開始し、翌19年度から講演会と研究サポート、平成25年度から市民と保健医療福祉専門職の双方を対象とするセミナー、そして平成27年度からは市民を対象とする講座（昭和生涯学習センターとの共催）の実施と、社会貢献事業は充実しつつある。しかし、人材も財源も限られる中での事業拡大は難しく、これらの事業を継続させるための工夫が現時点の課題である。

各事業の報告としても述べられているが、事業の継続に最も重要なことは、需要と供給のマッチングである。セミナーや講演会の対象者である市民の方々と看護職をはじめとする保健医療福祉専門職の皆様のニーズを把握し、地域社会における問題や課題を敏感にキャッチする必要がある。その一方で、看護学部教員や病院看護師が提供できる知識や技術を社会にアピールすることも重要である。また、財源は各事業の参加者から徴収する受講料のみであるため、年間の収支をふまえて適正金額を設定する必要がある。さらに、一部の者に頼るのではなく、より多くの者が社会貢献事業に参画できるような仕組み作りも必要である。

なお、昨年度の報告書の最後に名古屋市立大学看護学会（仮称）の設立と学会誌の発刊についての計画を述べた。本年度は準備委員会を立ち上げ、学会の位置づけや学会組織などを検討しているところである。その中で、改めて大学の役割としての教育研究と社会貢献事業のあり方を考え、本センターの役割を明確にしていくことも大きな課題である。